

会議録

内容承認	公開・ 非公開	<開催日>令和元年8月2日(金)		<傍聴人数> 1名				
藤田会長 木下副会長 北野委員		<時間>午後2時～4時		<傍聴室>				
	公開	<場所> 岸和田市立産業高等学校 同窓会館 2階 会議室		岸和田市立産業高等学校 同窓会館 2階 会議室				
<名称> 第2回岸和田市産業教育審議会								
<出席者> ◇岸和田市産業教育審議会委員 (○出席、■欠席)								
香月	北野	木下	杉山	武林	中井	中野	藤田	増谷
○	○	○	○	○	○	○	○	○
◇関係者 高橋中学校校長会会長 ◇出席者 樋口教育長 ◇事務局 (教育委員会関係) 藤浪教育総務部長・谷学校教育部長・高井教育総務課長・倉垣学校教育課長・ 石井指導主事・田井指導主事 (産業高等学校関係) 楠戸校長、榎本教頭、小林学務課長、稻田教諭								
<議題等> 1. 開会 2. 議事 (1) 学校紹介 (2) 特色ある取組みの説明 ・商品開発クラブの取組み (3) 資料の説明及び意見・質問に関する回答 (4) 事務日程について 3. 閉会								

<概要>

- 議事（１）について事務局（楠戸校長・榎本教頭）より説明
- 議事（２）について事務局（稲田教諭）より説明
- 議事（３）について事務局（楠戸校長・榎本教頭）より説明
- 議事（４）について事務局から次回開催スケジュール等の説明

【藤田議長】

ここからは私が議事を進行させていただきます。

まず、本会議の署名委員として北野委員を指名いたします。よろしくお願いいたします。

本審議会におきましては、岸和田市立産業高等学校のより良い教育環境を整備し、充実した産業教育を実現するため、委員並びに関係者の方々のご意見をいただき、審議してまいりたいと考えています。みなさん、今回もどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、議事の１つ目「学校紹介」について事務局からお願いします。

【事務局】

本日は産業高校において審議会を開催しておりますので、本来であれば校内をご案内させていただくところですが、時間の都合上、前のスクリーンにてご説明させていただきます。なお、ご希望がございましたら、審議会終了後にご案内させていただきますのでよろしくお願いいたします。では、楠戸校長及び榎本教頭より説明いたします。

【楠戸校長】

私からご説明します。前方のスクリーンをご覧ください。

（岸和田市立産業高等学校全日制について、楠戸校長から説明）

私からは以上です。

【榎本教頭】

続いて、私からご説明します。前方のスクリーンをご覧ください。

（岸和田市立産業高等学校定時制について、榎本教頭から説明）

私からは以上です。

【藤田議長】

説明が終わりました。事務局からの説明内容について、何かご質問などがございましたら、挙手し名前を言ってからお願いいたします。

ないようですので続きまして、議事の２つ目「特色ある取組みの説明。商品開発クラブの取組み」について、事務局からお願いします。

【事務局】

商品開発クラブの説明は、商業科教諭、商品開発クラブ顧問の稲田教諭より説明いたします。稲田教諭よろしくお願いいたします。

【稲田教諭】

私からご説明します。前方のスクリーンをご覧ください。

(商品開発クラブについて、稲田教諭から説明)

私からは以上です。

【藤田議長】

説明が終わりました。事務局からの特色ある取組みの説明について、何かご質問などがございましたら、挙手し名前を言ってからお願いします。

【杉山委員】

商品開発クラブは商業科の生徒だけということでしょうか。例えば、定時制の生徒が参加するということはできませんでしょうか。

【稲田教諭】

生徒に関しては全日制のみにはなりますが、商業科、情報科、デザインシステム科の3学科の生徒が対象となっています。実際の人数は、情報科が8名、商業科が8名、デザインシステム科が1名です。デザインシステム科の生徒にとっては商業のイメージがありますので、デザインシステム科の生徒が参加するかどうか心配していましたが、現在は3学科の生徒が活動しております。

【木下委員】

商品開発クラブに入部している生徒は、こういった目的で、あるいは何が動機で入っているのかが一点と、個人的な感想になりますが、実践的な学びとか実践的な教育というのが最近言われるようになってきていると思いますが、商品開発クラブの取組みを学校の特色ある取組みとしてあげたのは、キャリア教育をより推進していくというなかで、これをより多くの生徒へということで、学科とか産高としての特色づくりとしてやっていくという予定や案として話はでていることでしょうか。実際こういう取組みは商業科なのでできるかどうか、工業科だとどうしてもインターンシップとかそういうところになってしまうと思いますが、カリキュラム上とか日数の確保という点で問題はあると思いますが、秋田の方では40名程度ですけれども、学年ごとに内容を変えて販売実習とか商品開発をやっている高校があったかと思いますが、それを学校の特色にできるかなと思いました。

【楠戸校長】

後ほど私から説明しようと思っておりましたが、商品開発クラブが4年前に立ち上がったあと、先を見据えて商業科が管理するクラブのほうがいいだろうという私の思いもあり、関係教員と相談してそういう方向ですすすめました。ただ、その時には商品開発クラブがここまで発展するとは全く想像していませんでしたが、実際このような形で生徒の実践的な学びの場になったという結果が出てきましたので、できればこれをそのまま新学科に移行

した形で実践的な学びの学科をひとつ作れたらいいかなと思っています。

【稲田教諭】

動機の部分については、商品開発クラブの設立当初は1年生の2月に声掛けをしたのですが、ある程度商業の学びを受けたうえで入ってもらった方がいいだろうということでそうしました。一年目は私が担当していた学年ということもあり、入りやすい環境もあったのか12名が集まりましたが、翌年同じ時期（2月）に募集しますと6名になって、その翌年は1名になりました。この時期になると学生生活が確立されてしまい、なかなか加入には至りません。さらに、他のクラブに入っている生徒からも入れませんかという声もありましたので、このままではいけないということで、4月からの募集へと変更しました。その4月募集で加入した生徒達が今の2年生で、7名が入ることになったという経緯がありました。加入動機については、「デザインで学んだことを実際に役立てる」、「デザインすることが好きでそれを外に出せる」、「表現できる場があるというのはいいな」という生徒もいますが、一番多かったのは、「おもしろそうだ」という声です。実際に入った感想を聞くと、「もっと簡単にできるものだと思っていた」というギャップを感じたということでした。また、最初とても華やかだということと、こういう結果が出ているよと言って募集をしますので、そのようなイメージを持つんですが、実際に入ってみると「商品開発というのはこんなに苦労するのか」、「一個の商品を開発するのにこんなに大変なんだ」ということを身を持って感じているという声があります。

【中井委員】

素晴らしい成果を収められていると思います。ただ考え方は何種類かあると思いますが、ここでも大学進学の子も結構多いですし、大手企業については、入社してきた者については何年かにかわって自社の教育を行っている、地元企業ではそういう教育機関がありませんので、実践的な教育を行っているということも大きな意義の一つだと思います。ただ、15歳から18歳ということなので、非常に柔らかい時代です。ここで何かを決めていくのではなしに、生徒の可能性をいろいろ見せてあげるとするのは、生徒自身が自分で気が付くような教育の仕方も一つの考え方だと思います。この成果は素晴らしいし決して否定するものでもないが、どっかにどれかというのを決めるのは、少し早い時期ではないかというのはお聞きしていて感じたところです。それはどうでしょうか。

【稲田教諭】

どっかにどれかというのは、進路先のことでしょうか。

【中井委員】

決して悪いことはないけれども、卒業する時点で、例えば情報産業であれば、向こうの裾野は多いです。商業の中でも簿記とか基本的な教育をやっていくなかで、どの方向に進むのか、これも教育だと思います。デザインもそうですが、ただある種の決め打ちといい

ませんけれども、少し固定化するというのは、なかなかしんどいかなと思います。

【稲田教諭】

18名の卒業生がいますが、ここに挙げた4、5名については説明したような道に進んでいきました。ただ、全員がそういったことではなくて、実際にメインで活動している現2年生についても、進路先についてはばらばらで、生徒たちなりにどんな捉え方をしながら、このような活動に一生懸命取り組んでいるのかと考えていたところです。卒業してどんな道に進むにしても何かしら経済活動には携わって、どんな企業でも利益を上げていかないといけない状況があります。生活をしていても経済生活とは切っても切り離せないところがあります。知識の一つとしてこの活動を捉えてもらえばと思い生徒たちと接しています。

【中井委員】

もちろん否定はしていません。すばらしい成果だと思っています。ただ、例えば販売するにしても、小売りをしたりするにしても、いろんな日本全国といたしましても、嗜好もなにもかも変動したりする。そういうような基本的なことを学んでおかないと、いざ大きな舞台に出た時に、スケールの小さいところで終わってしまう。もっと基礎的な、いろんな語学教育にしてもそうですし、統計にしてもそうですし、いろんな基礎があります。それを学ばせながら、実践的なところにつなげていきませんか、実践ばかりやっていると、物を売るにしてもいろんな戦略があって、その戦略の後ろ側を理解していませんと、そこだけで終わってしまう。深い戦略などをきちんと学べるようにしていただくことが、学校教育、あるいは商業教育として大事ではないかと思っています。

【楠戸校長】

大きな方向性としてこういうふうな学びをと思っていますが、あくまでも現在の商業科にしても情報科にしても、商業に関する学科ですので、例えば新学科を立ち上げたときに商品開発だけの学びということはまずありえないと考えています。当然カリキュラムは三年間を見通したものをつくっていくことになります。商業に関する学科を卒業するわけですから、簿記の授業も当然必要になってくるでしょうし、コンピューターの授業もゼロではありませんし、そんな中でどれくらいのウエイトで発表したような学びをもっていくかというのは、まだまだこれからの話だと私は思っています。

【稲田教諭】

今後の参考にさせていただきます。

【武林委員】

今までの内容をいろいろ聞かせていただいて、高等学校は何を特色としているかというのが、キーワードになっていると思います。産高では、デザインと情報と商業ということ

になっています。発表された商品開発クラブの実践は「うちの先生」ということで新聞を見させていただきましたが、全人的な教育をこの商品開発ということを利用して、やってるといことは素晴らしいことだと思います。だいぶ前に大阪府の商業教育協会で、今の発表をされたと思いますが、そこからすると経験が具体的で、評価が表れてきていると思います。今先生がおっしゃったいろんな能力、企業が求める能力と一致していると思います。もちろん、中井委員がおっしゃいましたように、基礎基本を踏まえたなかで、一つの特色としてそういうことを打ち出す生徒がいてもいいだろうと思います。なおかつ会計学、財務商標学とかそういう方向を目指す生徒がいてもいいと思います。商品開発クラブでもデザインをできますので、そういうところでその力をだしてもらってもよいですし、いろんなコースとかそういう場を作っていく、生徒が一番興味を持てるようなシステムづくりをしていくと非常にありがたいなと思います。デザインシステム科についてはある程度の特色ができあがっていると、情報科についてもできつつある、商業科の4クラスをどういう風にもっていくのか、今のところ会計学のところで資格を取らせたらどうかということと、大学進学ができることと、これからは国際が入ってくると思いますので、グローバル化、これを商業科のなかで一つの特色としてもっていけないかと思います。英会話にしても、海外の人と交流できるような能力が持てるようなコースが作れないかなと思います。もうちょっとまとめていきたいとは思いますが、今の段階で疑問に思っていることと、こういう方法で行ってはどうかと思っているところをもう少し具体的に考えていかないといけないと思っています。

【中井委員】

今、おっしゃっている国際化という話に対しては賛成です。考えていただきたいのは、企業は高校卒業であればどういう人材を求めているかということです。状況というのは常に変化していきます。10年20年30年、長い人生のなかでいろんな変化が起こるでしょうし、それに対応できるような人材と、それから企業環境というのは常に変わっていきます。グローバル化というのは、ここ10年20年位の話だと思いますが、この間に日本の英語教育が非常に貧弱なために、企業に入ってくる人材に英語教育をやらないといけないというようなことになっています。そういうことも含めて、実践的なことももちろん先ほどおっしゃられたように、野球を通じて全人教育をすとか、あるいはこういうふうな実質的な商業を通じて全人教育をすというような、決して否定するものではありません。非常に大事なことだと思います。ただ、10年20年30年、その人が変化に耐えられるような人材を産業界に輩出していただきたいというのが基本的な考え方です。

【藤田議長】

各委員がおっしゃっているところで言うと、大学でも言われているところですが、いわゆるジェネリックスキルというところ、商業高校としてのジェネリックスキル、商業高校を出たら必ずこれは勉強しておいてもらわなければいけない、身につけておいてほしいという部分を踏まえたうえでということだと思います。それと合わせて、これは文部科学省

から言われているところで、大学でも同じですが出口を意識した、進路を意識したコースづくりをしてくれということが文科省からも出ているところですので、そういうところのバランスをいかにとっていくかということだと思います。そうした時にいわゆる商品開発クラブというのは大変特色があっておもしろいとは思いますが、ある種、特別カリキュラム的な置き方っていうのが、ひとつ付け方としてはあるのかなと思うところですが、それはまた今後、そのあたりどういう風にバランスをとっていくかというところはまた、進路等の話を聞きながら議論していきたいと思います。

【藤田議長】

続きまして、議事の3つ目、「資料の説明及び意見・質問に関する回答」について、事務局からお願いします。

【事務局】

議事の3につきましては、配布資料並びに前方スクリーンにて、楠戸校長及び榎本教頭より説明いたします。よろしく願いいたします。

【楠戸校長】

私からご説明します。前方のスクリーンをご覧ください。

(付属資料1～7、11～14について、楠戸校長から説明)

私からは以上です。

【榎本教頭】

続いて、私からご説明します。前方のスクリーンをご覧ください。

(付属資料8～10について、榎本教頭から説明)

私からは以上です。

【事務局】

楠戸校長並びに榎本教頭から説明をいただいたところですが、説明内容と関連して委員からいただいた意見にも関わる内容ですので、合わせて楠戸校長より説明いたします。

【楠戸校長】

さきほど、商品開発クラブのプレゼンテーションをご覧いただきましたが、この活動がまさしく木下委員より質問をいただいた「実践的ビジネス教育についてもっと具体的に説明してほしい」という内容に対する回答になるかと思えます。

商品開発クラブの生徒達は校内だけでなく校外における企業様との交渉などを通じて大きく成長し、このような実践的ビジネス教育を通じた教育効果は商品開発クラブの活動により検証済みと考えています。また、その教育効果も、新学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」に合致していると考えています。私としては、このような

商品開発クラブの学びを新学科へと移行したいと考えています。

また、商品開発クラブは生徒会組織の部活動ではなく、商業科が管理する課外活動組織として位置づけています。したがって、商品開発クラブの活動については、適宜商業科教員で編成される商業科会議で報告し、意見交換も実施しています。また、必要に応じて商業科教員も商品開発クラブの活動をサポートしています。そういった点で、中野委員の意見にあります「魅力ある学科改編には・・最低3名が必要」という部分もクリアできるのではと考えています。

さらに、商品開発クラブの活動の重要な一側面として、プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力が挙げられます。商品開発クラブの学びを新学科へと移行した場合、その教育活動の成果を高めるためにはプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力の高い生徒が望まれます。

画面は、東洋経済新聞の記事で東京大学4回生が執筆した記事の抜粋です。この記事が示すところは、学力の高さ、イコール、プレゼンテーションの高さではないということです。東京大学でも推薦入試で面接を受けた学生の中にはプレゼンテーション能力の非常に高い学生が含まれているとのこと。プレゼンテーション能力は学力とは異なる別の物差しが必要であることをこの記事は示していると考えます。

このような理由から、商品開発クラブの学びを新学科へと移行した場合、面接を実施することによりプレゼンテーションの能力・コミュニケーション能力の高い志願者を少しでも多く入学させることが必要であると考えています。

そして、7月中旬に実施した本校の学校協議会で協議員の皆様に対して商品開発クラブのプレゼンテーションを実施し、協議員の皆様からご意見を頂戴しました。協議員には企業の方もいらっしゃいますが、プレゼンテーションをご覧いただいた感想として、「このような学びを高校時代にした生徒達は、企業においてもすぐにリーダーとして活躍できるのではないかと。是非、このような学びを多くの生徒に広めていっていただきたい」とコメントをいただきました。参考までに紹介しました。

木下委員からのもう1点の質問にもお答えしたいと思います。

キャリア教育と就職指導の本校における位置づけですが画面の方をご覧ください。

これはかつての産業高校の状況です。かつては就職するなら産業高校という状況で、ほとんどの生徒が就職希望でしたので、就職指導、社会人教育がそのままキャリア教育になっていました。そして、これが現在の産業高校の状況です。

就職する生徒が約3割となり、4年制大学、短期大学、専門学校等本校卒業時の進路も多様化しました。

そのような中で、産業高校が以前から持っている就職指導、社会人教育の質の高さについては、進学する生徒達も2年後、4年後には就職を迎えますので、進学という出口だけの対応にとどまらず、在学中にも本校の建学の精神である「地域社会に有為なる人材の育成」を目指した社会人教育に取り組むことが本校のキャリア教育の大きな特色になると考えています。

また、本校はもともとほとんどの生徒が就職する学校でしたので、就職指導システムは

しっかり出来上がっていました。反面、進学指導については担任のマンパワーに頼っていたところが大きかったかと思います。

現在は、進学対応もしていますが、画像のような全体像を見渡したうえで1年生から2年生におけるシステム化された進路選択指導をいかに構築していくかが課題かと考えています。特に、本校も世代交代の波が押し寄せ、若い先生方が増えてきましたので、そういった意味でも進路指導における資質向上と指導システムのバランスのとれた進路選択指導の構築の必要性を感じているところです。

以上で木下委員よりの質問の回答といたします。

私からは以上です。

【藤田議長】

説明が終わりました。事務局からの説明内容について、何かご質問などがございましたら、挙手し名前を言ってからお願いいたします。

【武林委員】

面接を取り入れるというのは、入試のなかに面接を取り入れるということですか。

【楠戸校長】

はい、そうです。エンパワーメントスクールなどで面接を取り入れている学校もありますので、本校も特色づくりという大きな目的があったうえでということですか。

【武林委員】

面接を取り入れると、デザインシステム科のような、特別入学者選抜になるということですか。

【楠戸校長】

そのようにしていただければと思います。

【武林委員】

していただければというのは、大阪府教育委員会のことですか。

【楠戸校長】

はい。公立高等学校入学者選抜は大阪府教育庁との兼ね合いがございます。

【武林委員】

大阪府教育庁の考えはいかがでしょうか。

【楠戸校長】

まず、岸和田市教育委員会と相談させていただいたうえで、その後、岸和田市教育委員会と大阪府教育庁との相談になるかと思えます。

【中野委員】

私が出した意見の中で教師が3名と言いましたが、この意味は、大阪府教育庁からも委員として出席されておりますので、今の入試も同じようなことになると思いますが、岸和田市教育委員会に人事的に応援してほしいという意味で言いました。資料13にありますように、非常に高齢化がすすんでおりますが、本当にいい年齢構成になり、やりきれることを願っております。

【藤田議長】

資料15に前回の意見書で中野委員からいただいたご意見、ご提案をいただいているようですが、ご提案に何かご意見等々何かありましたらお願いします。

【中野委員】

意見にありますように、私が工業高校で勤めてきた経験から言いますと、この学校を選んでくれる、この学科を選んでくれるというのは、最終的に保護者の意見が非常に強いです。保護者の理解を深めることが大事だと思いますので1番を書きました。保護者は自分の子どもを行かしても大丈夫か、こういう面は得意だけどこういう面は不得意なところがあるという心配をされます。けれども岸和田の地域としての応援体制があるということで、産業高校に入られている方が多いので、応援体制がひかれている学校であるという安心感や提案で書きました。しかし、中学校をなぜ書いたかというと、中学校を回っていますと、進路の先生や学年主任の先生が毎年変わるわけです。去年説明したが今年の先生にまた説明しないといけないことが起こるわけです。そうすると、中学校との先生との連携をつなげていくためには、産業教育という面でいくと、技術家庭の先生を接点として中学校の先生に広めていくという方法で、意欲意識の高い中学生をどういう風にして入ってもらうのかということの主眼において中学校との連携を進め、またつながりを継続的につくるために、技術家庭の先生との交流も必要ではないかと思えます。これが補足でございます。

【中井委員】

中野委員の提案には岸和田産業教育振興会を設立することについては全面的に賛成します。今の基盤状態では、先細りが見えていると思います。教育委員会も企業も含め、また関連大学、中学校、OBの方を含めた大きな基盤を作ったうえで、一つの特徴ある方向へ進めていけたらよいと思います。また、なぜ専門学校に行く人数が増えているのか、おそらく高等学校の18歳までの教育では、社会で物足りないということが一因ではと思っています。30年ほど前の簿記を含めた商業科の人は確かに即戦力でした。今の時代では

それでは足りない。だから学校教育の補完として、企業は教育を続けなくてはならない。少なくとも、長い所では10年間のキャリアを積ませる教育を企業は実践的にやっています。中小企業の方はそこまで余裕がありませんので、それに対して補完的に実践教育をするところはありがたいが、その水準も少し上げていただかないと、今後の社会全体に対して欲求を満足させるような教育にはならないと思います。そのためにもバックアップする組織を少し手厚くしていくということが大事だと思います。特に、企業の応援というのは非常に大事だと考えておりますので、一度また議論を深めていただければと思います。

【北野委員】

現在子どもがデザインシステム科で在籍しており、上の子どもは今年情報科を卒業しました。中野委員がおっしゃっていた中学校との連携ですが、中学校の先生と進路相談しますが、産業高校をあまり進められません。産業高校に行くと大学に進学できないと思っている先生方が多いです。学習塾の先生からも反対されました。その先の広がりがないというか、産業高校に行ったら就職して終わりというか、そういう考えを持たれています。産業高校イコール就職というイメージはすごくあります。自分の子どもも就職するために入りましたが進学しました。だから、大学も行けることを中学校の先生方や進学塾の先生方に伝えた方がいいと思います。

【杉山委員】

私が産業高校で野球をやっていることもあり、甲子園出場選手の保護者から聞くと、産高へ行きたいと思っていたが成績が足りず行けなかった。特待生制度もあり私立に行くという人も多いです。学校の特色として勉強も大事です。その人生の勉強からいくと三年間、運動をするというのも重要なことと思います。十数年前から言われていたことですが、産高にスポーツ科を作ってほしいということです。高校野球というのは非常に宣伝にもなると思います。商品開発クラブであれ、あるいはアーチェリーなどの部活動もありますが、やはり知名度は低いです。そういうなかでも産高に行きたいという生徒はたくさんいます。それこそ、甲子園に出場した生徒などいろんな方がいます。そういう方たちが来れば、例えば野球であれば一目置かれると思います。産高に行こうという生徒も増えてくると思います。商品開発クラブを中心とした特別クラスをひとつでも、情報、商業、デザインシステム以外にも可能であれば作っていただければと思います。作れるのであれば何とか皆さんの力を借りて応援してもらえないかという意見を述べさせていただきました。

【高橋校長】

先ほど、産業高校から大学進学の実践が足りないのではという話がありましたが、中学校の教頭会には産業高校の教頭先生も入り、話も聞かせていただいておりますし、教師対象の説明会の話も聞かせていただいたり、中学校の方でも産業高校から大学に行っているというパンフレットをもらって学校で周知したりしています。また、校長会にも校長先生に来ていただき話をしてもらっていますので、方法としてはいろいろ工夫してやっていた

だいています。どうしても商業科という名称が府内全体で商業科の人数が集まらない、産高の方は健闘して集まっていると思います。やはり、岸和田の中で産業高校というのは、特別な位置を占めていますし、名前を変えたらいいというものではありませんが、商業科という名称により卒業したら働くというイメージがどうしてもついてしまっているところがあるのではないかと思います。

【藤田議長】

いろいろとご意見があったが、今後の再編等の在り方については、いくつかの切り口があると思います。地元産業界からの要請という部分であったりとか、現場の生徒からであったりとか、卒業生の想いであったりとか、そしてもう一つは、考えなければいけないのは現在通っている生徒たちの今後の進路の在り方だと思います。そういったあたりをどういう風に見据えて、組み立てるかという部分、進路の資料を提示していただいたなかでも、進学、就職等々およそほぼ同数というなかで、そういった部分をどうそれぞれ満足させられる仕組みを作りだせるか、至難の業だと思うが、そのあたりをひとつ学校側からは、現在の魅力ある取組みとしての商品企画の在り方をうまいこと、できないかということでご提案いただいているところですけども、そのあたりを軸に、先ほど、スポーツ、部活動の部分での今後の発展系の在り方についてという部分も含めて、いくつかの方向性を軸に、進めていければとおもいますので、また次回までにご質問等を言っていただいて、それに対して学校側から資料を示していただけたらと思います。

【藤田議長】

続きます、議事の4つ目、事務日程について説明させていただきます。

(議事(4)意見書・次回開催スケジュールについて説明)

【藤田議長】

以上で本日に予定していた内容は全て終わりました。委員のみなさまのご協力、ありがとうございました。これにて、第2回岸和田市産業教育審議会を閉会といたします。

会 議 録

内容承認	公開・ 非公開	＜開催日＞令和元年6月10日（月）	＜傍聴人数＞ 0名
藤田会長 木下副会長 香月委員		＜時 間＞午後3時～4時	＜場 所＞ 岸和田市立福祉総合センター2階 活動室
	公開		

＜名称＞ 第1回岸和田市産業教育審議会

＜出席者＞

◇岸和田市産業教育審議会委員（○出席、■欠席）

香月	北野	木下	杉山	武林	中井	中野	藤田	増谷
○	○	○	○	○	○	○	○	○

◇関係者

高橋中学校校長会会長

◇出席者

樋口教育長

◇事務局

（教育委員会関係）

藤浪教育総務部長・谷学校教育部長・高井教育総務課長・倉垣学校教育課長・
石井指導主事・田井指導主事

（産業高等学校関係）

楠戸校長、大西教頭、榎本教頭、小林学務課長

＜議題等＞

1. 開会
2. 委嘱状交付
3. 教育長挨拶
4. 出席者の紹介
5. 会長・副会長の選出
6. 諮問
7. 議事
 - (1) 資料説明「岸和田市立産業高等学校の教育について」
 - (2) 事務日程について
8. 閉会

<概要>

- 教育長挨拶
- 委員自己紹介、関係者、出席者、事務局紹介の後、会長・副会長の選出（互選）
会長に藤田委員を推薦（事務局一任） ⇒ 承認
副会長に木下委員を推薦（会長一任） ⇒ 承認
- 議題6について教育長から説明と諮問書の手交
- 議題7の議事（1）について事務局から説明
- 事務局の説明を受け、質疑・意見交換
- 議題7の議事（2）について事務局から次回開催スケジュール等の説明

■議題6～8

【事務局】

第1回「岸和田市産業教育審議会」を開催するにあたり、教育長から会長への「諮問」をいたします。お手元の資料4「諮問書」をお願いいたします。それでは、教育長よろしく申し上げます。

（諮問について、教育長説明、教育長から会長へ諮問書手交）

【事務局】

それでは、「岸和田市産業教育審議会規則」第5条第1項に「審議会の会議は、会長が招集し、会長がその議長となる。」とありますので、以降の進行を議長をお願いいたします。

【藤田議長】

それでは、ただいまより進行いたします。まず、第1回審議会の署名委員として香月委員を指名いたします。よろしく申し上げます。

本審議会におきまして、岸和田市立産業高等学校のより良い教育環境を整備し、充実した産業教育を実現するため、委員並びに関係者の方々のご意見をいただき、審議してまいりたいと考えています。みなさん、よろしく申し上げます。

では、先ほど、岸和田市教育委員会教育長より、岸和田市立産業高等学校の今後の教育について「諮問書」が示されました。委員のみなさまにおかれましては、「諮問」の趣旨をお汲み取りいただき、本日の審議会以降においてもよろしく申し上げます。

続きまして、議事の1つ目、資料説明「岸和田市立産業高等学校の教育について」、説明をしていただきます。事務局、よろしく申し上げます。

【事務局】説明につきましては、産業高等学校楠戸校長より説明いたします。

【楠戸校長】

私から説明いたします。資料5岸和田市立産業高等学校の教育についてをご覧ください。

(パンフレット及び資料5について、楠戸校長から説明)

【楠戸校長】

岸和田市立産業高等学校の教育についての説明は以上です。

【藤田議長】

説明が終わりました。事務局からの説明内容について、何かご質問などがございましたら、挙手し名前を言ってからお願いいたします。

【中井委員】

定時制の志願者数が減っているということだが、具体的にはどの程度なのか。

【楠戸校長】

今回の会議のときに、詳しいデータをお示ししながら説明する時間をとっていただけると聞いていますので、その時に定時制だけでなく、本校の状況に関するデータを基に説明させていただいてご意見を頂戴できればと思っています。

【藤田議長】

他にないようですので、続きまして、議事の2つ目、事務日程について説明させていただきます。

(議題7の議事(2)意見書・メールアドレス登録・委員報酬・次回以降開催スケジュールについて説明)

【藤田議長】

以上で本日に予定していた内容は全て終わりました。委員のみなさまのご協力、ありがとうございました。これにて、第1回岸和田市産業教育審議会を閉会といたします。